

# 中国における老年大学のシニアの 学習ニーズに関する研究

CHEN Yanru

本研究では、中国における老年大学の在籍生を対象とし、彼らの学習に対するニーズを明らかにする。日本の高齢者の生涯学習に関する理論や先行研究を参考にし、今回の調査の流れを作り、中国の3つ地方の老年大学(湖南省長沙市、湖南省衡陽市、雲南省雲南市)の在籍シニア及び高齢者たちにインタビューを行った。現在中国における老年大学が設置しているカリキュラムを着目し、シニア層の高齢期の学習をめぐる回答により、高齢者教育機関である老年大学のあり方を検討した。

世界中で「人口大国」と呼ばれる中国は、1979年から実施された「一人っ子政策」(2015年に廃止された)により、人口構成のバランスが崩れているのが現状である。高齢化社会とは60歳以上の人口が総人口の10%を超える場合、または65歳以上の人口が7%を超える場合を指している一方、2017年末の時点で中国における65歳以上の人口が1.58億人に達しており、総人口11.4%を占めている。国連の人口推計によると、2025年には中国の総人口における高齢者の割合が14%に達すると見込まれる。驚かせるスピードで高齢者社会に突入した中国では、シニア層の社会福祉、生活環境、精神健康などが近年に話題となり、対応策と考えられる高齢者教育などにも注目されてきた。

シニアの学習の場として、中国の老年大学は主に趣味・娯楽類の科目を設置している。今回の調査で、筆者は中国における3つの老年大学のカリキュラムを調べ、各老年大学に在籍しているシニア層および高齢者に個別インタビューを行った。調査を協力してくれた老年大学の在籍生は長沙市老幹部大学の3人、衡陽市老幹部大学の2人、雲南市老年大学の2人であり、合計8人である。年齢層別によって区別すると、50代は3人、60代は3人、70代は2人である。調査対象者にそれぞれ45分から80分程度で個人状況や学習をめぐる質問をし、回答をデータ化し、彼らの個人情報、特徴、学習に参加する目的などをまとめた。

インタビュー調査から得た結果を分析し、それぞれ持っている学習ニーズを2つの軸を組み合わせることで4つの類型に分けられた。

今回の調査結論をまとめると、シニアの学習ニーズを類型化し、「自己啓発実用志向」、「自己啓発趣味志向」、「交流趣味志向」と「交流実用志向」4つのタイプのうち、全体的に見れば、趣味志向の傾向が実用志向より圧倒的に多い。趣味志向が強い人に、趣味を生かし、自己実現を目指す自己啓発志向と、趣味の学習を通して他者との交流を目的とする交流志向が存在する。これら同じ趣味志向を持ち、2つのタイプに分けられた人々に、差異をもたらしたのは個人の年齢、学歴など外在的な要素ではなく、ライフヒストリーを振り返り、それぞれ異なる人生経験だと考えられる。

対象者に実用志向の傾向が顕著に少ないことが分かった。自己啓発実用志向のタイプは1人も見つからず、交流実用志向を持っているのは1人のみであった。その原因を考察すると、老年大学が設置している趣味を中心とするカリキュラムと修業規定と緊密な関係があることがみられた。

中国は今後高齢化社会に進んで、一層の高齢者の割合は高まるため、日本に限らず、中国においても高齢社会への取り組みが必要となる。特にシニア層を対象にした老年大学は中高年齢者へ学習ニーズを満たしていくうえで、極めて重要であろう。従来の老年大学に見られたような趣味・余暇的な科目のみならず、シニア層がリカレント教育によって実用的知識を得て、また自らの職業を生かした社会地域貢献するためにも老年大学におけるカリキュラムや制度の見直しも必要となるであろう。これは現在、日本でも提言されている「生涯現役社会」あるいは「アクティブエイジング」を中国社会においても促進していくことになるであろう。

本研究では、いくつかの課題も残る。第一に、各老年大学のインタビュー対象者数が少ないため、学校の全体的状況については、十分に把握できていない。第二に、調査を受けてくれた対象者状況によって1人ずつへのインタビュー訪問に使った時間が異なり、インタビューから得られた情報にやや偏りがある。こういった調査方法が残されるが、アンケート調査も含めた老年大学在籍者の学習ニーズを多面的に把握することが次の課題となるであろう。